

# 紫上論

大井由美

## 序

若菜上巻で夕霧が、幻巻で源氏が、紫上についてそれぞれ次のように語っている。

紫の御用意気色の、こちらの年経ぬれど、ともかくももり出で見え聞えたる所なく、しづやかなるを本として、さすがに心美しう、人をも消たず、身をもやむごとなく、心にくくもてなし添へ給へる事と、見し面影も忘れ難くのみなむ思ひ出でられける。(若菜上<sup>p106</sup>)

先づかやうのはかなきことにつけても、そのことのさらでもありなむかし、と、思ふに違ふ節なくとも、やみにしかな、と、いはけなかりし程よりの御有様を、いで何事ぞやありし、と思し出ずるには、先づその折かの折、かどかどしうらうらうじう、にはひ多かりし心ぎま、もてなし、言の葉のみ、思

ひ続けられ給ふに、例の、涙のもろさは、ふとこぼれ出でぬるもいと苦し。(幻<sup>p118</sup>)

紫上絶賛のこの評価は、もちろん紫上の一面を表すものとして正しいのだが、しかし、これらの記述の視点は、あくまで紫上の外側にあるように思える。外側から見た紫上が、素晴らしく理想的であることは、彼女の一面を表す紛れもない事実であろうが、それとは逆に、その内面に立ち入って紫上を考えることによって、また別の彼女の一面を見ることができないのではないだろうか。

たとえば、紫上が「生けるかひありつる幸人」(若菜下<sup>p185</sup>)と呼ばれている場面があるが、一見紫上の幸福を語っていると思われるこの言葉の裏に、実は紫上の内面の苦悩という一面が隠されているのである。この「幸人」には、明らかに皮肉な意味合いが兼ねられているのであるが、皮肉にしろ、人々に「幸人」と言われるような立場を、ともかくも彼女は自らの苦悩によって、維持

し続けたのである。不当だけれど正妻格に納まっている「幸人」、  
というような皮肉を言われる程の不安定な状況の中で、紫上は幾  
度かの危機にさらされるが、その度に彼女は苦悩しながら、一つ  
ずつ危機を乗り越えて、自分の立場を守っていったのである。こ  
こでの外側からの「幸人」を扶けてみた時、そこには外側の人々  
にはわからない紫上の内面の苦悩があるのである。<sup>注1</sup>

私は、このような紫上の内面、特に、彼女を外側から見ている  
だけでは決してわからないであろう「苦悩」に力点を置いて、紫  
上の人生全体における苦悩の意味を考えてみたいと思う。

## 一 紫上の苦悩

紫上の苦悩は、常に三角関係の中で引き起こされるわけなのだ  
が、ここでは特に、藤壺、明石君、朝顔斎院、女三宮という四人  
の女性が、源氏と紫上の間に介在することによって生じる彼女の  
苦悩について考えていきたい。

### (一) 藤壺

若紫巻での登場に際しての紫上には、あくまで藤壺の身代わり  
であるというそのイメージが、かなり強く印象付けられているよ  
うであるが、忘れてならないのは、結局その裏には、藤壺を慕う  
源氏の深い想いがあったのだということである。

もちろん、源氏との結婚や別離の時代を経ることによって、紫  
上は彼女自身の個性を次第に伸ばし、少しずつ藤壺から離れてい  
ったのだと思われるが、このような登場の仕方であったからか、  
紫上はなかなか完全には藤壺と切り離されることがなく、源氏は  
意識のどこかで常に紫上に藤壺を重ねていたように思えるのであ  
る。

確かに、源氏の藤壺を慕う気持ちが紫上に向かっていく間、す  
なわち、紫上が藤壺の代わりとしての役目を果たしている藤壺生  
存中は、藤壺の存在は紫上に一応の幸福をもたらしていたと言え  
るであろう。孤児同然の紫上が二条院に引き取られ、源氏の正妻  
格にまで納まったというその幸福の最大の要因は、源氏が藤壺を  
慕っており、紫上が他ならぬその藤壺の「ゆかり」であった、と  
いうことにあると言っても、決して過言ではあるまい。

しかし、よく考えてみれば、源氏にそういう気持ちがある限り、  
紫上に注がれる源氏の愛を十とするなら、その十全部が紫上のも  
のであるというわけではなく、そのうちの幾らかは、藤壺への愛  
なのである。一見紫上への愛と見えて実は藤壺への愛、という部  
分があるというのでは、紫上は本当の意味での幸福を掴んだとは  
言えないように思うのである。

この、源氏が藤壺を慕う気持ちは、藤壺死後も依然として変わ

らないのだが、朝顔巻では、源氏はもはや紫上に藤壺の面影を求めることができなくなっていたようである。そのために、源氏は紫上以外の女性に藤壺の面影を求めていくことになるのである。

まず、朝顔齋院であるが、藤壺亡き後、源氏はその面影を求めて急激に齋院に接近していったのだと私は考える。(詳しくは(三)、朝顔齋院参照)そしてもう一人、女三宮についても、彼女を迎え入れようとする源氏の動機の一つに、女三宮が藤壺と血縁関係にあるということがあったのである。(詳しくは、(四)女三宮参照)結局、この二人の女性の出現によって、紫上はそれまでになく深く苦悩していくことになるのであるが、彼女を苦しませる事件のきっかけが、実は源氏が亡き藤壺を追い求める気持ちであったということに、ここでは特に注目したい。

このように、源氏の中から藤壺を追い求める気持ちが消えない限り、永遠に藤壺の存在は紫上に係わり続け、また、そうである限り、紫上には真の意味での幸福は決して訪れないのである。そして、源氏の中から藤壺を追い求める気持ちが消え、紫上が真に藤壺の存在から解放されるのは、それがもとで病に倒れてしまう程の重い苦悩を彼女にもたらした、女三宮降嫁事件以後であったと思われる。それ程の重い苦悩と引き換えにでもしなければ、紫上は藤壺の存在から解放されることはなかったとも言うのであ

ろうか、これはあまりにも皮肉な結末であるように思う。

源氏、紫上、藤壺という三角関係は、見えざる三角関係とでも言おうか、藤壺と紫上の間に全く接触がなく、お互いがお互いの存在について深く関知していないという点では、他の三角関係に比して特殊であろう。しかし、紫上と源氏との間に藤壺が介在することによって、すなわち源氏が藤壺を慕うことによって、紫上の人生には幸福も苦悩も、もたらされるというわけで、その意味はあまりにも大きい。実際に紫上は、この見えざる源氏の思慕が引き起こす事件の中で苦悩することになるのである。そこに注目して、この関係は特殊ではあるが、紫上に苦をもたらす三角関係の一つとして、敢えてここで取り上げてみたのである。

「藤壺のゆかり」として物語に現れた紫上が藤壺を超えたかどうか、というのは大変難しい問題である。源氏が最高の女性として憧れ、また理想とする藤壺と同じ意味では、その存在を超えられなかったかもしれない。しかし、単なる「ゆかり」や身代わりの域は脱し、なんら藤壺とは別の意味で、源氏にとって重い位置を占める女性に成長し、彼女自身の魅力で源氏を惹きつけるような多くの面を持つようになったという事実は、認めざるをえないと思う。が、紫上がどんなに藤壺から離れた自分というものを持つようになったとしてもなお、藤壺の存在は、見えない所で紫上に係わ

り続けるのであって、それは今まで述べてきた通りである。源氏自身の中で藤壺を追う気持ちが消えない限り、彼女は完全に藤壺の存在から解放されることはなかったのである。

以上のことから、特殊ではあるが、この見えざる三角関係の中で幸せになり、また苦しんでいる紫上の姿を十分にとらえることができるように思うのである。

## 二 明石君

源氏、紫上、明石君という三角関係の中での紫上の苦悩は、一言で言えば、嫉妬に係わるそれであろう。

紫上の嫉妬は、単に男性からみて理想的なものというだけでなく、それは紫上の大切な個性の一つとして、彼女の内面に深く根差しているものである。唯、純粹に源氏の愛情だけをめぐって生じてくる不安を素直に表現する（もちろん、ある程度の節度をもってであるが）というのが、紫上の本来的な嫉妬の形態であるということが、まず一つここで確認されるのである。この嫉妬の性格を示すにあたって身分的に紫上の地位を脅す懸念のない明石君の存在は、まことに好都合であったわけである。

そして、紫上にこのような嫉妬の性格があったからこそ、これより後もライバルが出現する度に苦しむことになるのであるし、また、特に朝顔斎院や女三宮などの身分の高い女性が現れた時の

紫上の嫉妬の態度が、ここで確認された性質のものとは全く違ってることから、その時紫上にもたらされた打撃が、いかに大きいものであったかを知ることにもなるのである。

ところが、明石姫君の出現によって、紫上の嫉妬は、そういった本来的な姿を失い、より深刻なものへと変わるのである。そのことによってもう一つ、子供に恵まれないという劣等感による彼女の苦悩や悲しみが明らかに becoming くるわけである。

確かに、紫上は姫君を得て、非常に嬉しかったのである。不自然な程、姫君を熱心に愛育することも、姫君故に明石君を許すことも、子を奪われた明石君への同情も一時忘れてしまうことも、すべてそうせずにはいられなかった程に、彼女は嬉しかったのである。しかし、他人の子を、しかも嫉妬の相手である明石君の姫君を得、夢中になって愛育する姿に、私は却って、子供のない女性の悲しさや苦悩、哀れささえ感じるのである。喜ぶ気持ちの裏を返せば、そこから紫上がどんなに子供を望んでいたか、源氏の子を生んでいないことがいかに重い劣等感であり、悲しみ苦しみであったかということをはかえるであろう。

ここで、ではなぜ紫上には実子がなかったのであろうかということについて少し考えてみたい。この場合、子供好きで、しかもしっかりと母性を持った、源氏の正妻格たる紫上に実子がな

いということ、いかにも不自然なことであって、これは作者が意図的に仕組んだことであると、まず考えることができるであろう。では、なぜ作者はわざわざこのような設定をしたのであろうか。このことについては、様々な観点からいろいろに考えられると思われるが、<sup>注2</sup>今、紫上の立場から考えてみると、次の二つのことと言えるのではないかと思う。

一つは、純粹な愛情のみで源氏と繋がっている紫上の不安定な立場やその状況をあくまでも保とうとしたからだ、ということである。後に紫上は、朝顔齋院や女三宮のような高貴な身分の女性達の出現の際に、自分の地位の下落を考えて苦悩することになるのであるが、その時、紫上の不安定な地位をより不安定にしているものに、実子がないということも少なからず含まれていたのだと思われる。当時の女性にとって、子供の存在は、<sup>注3</sup>自分自身の身分の保障にもなっていたのである。

そして、もう一つは、紫上が晩年出家を志す時に、現世への執着となるようなものを残さないために、紫上には、わざわざ子供を与えなかったのではないか、ということである。

以上の二点のうち、一つは後の三角関係における苦悩に関係し、また、一つは晩年の出家志向に関係してくるということで、ともかくも子供をめぐる問題は、紫上の後の人生にも大いに関連して

いるのだということが、ここで一つ言えそうである。

### (三) 朝顔齋院

朝顔巻で源氏は、他の巻々では見られない程に、朝顔齋院に執心する。朝顔巻だけに特別なこの執心の意味は何かということ、まず初めに考えてみたい。

結論から先に言えば、朝顔巻での齋院への源氏の懸想は、藤壺亡き後、その面影を齋院に求めていたことによるのだと思われる。<sup>注4</sup>そしてそれは、藤壺亡き後、その「ゆかり」である紫上の位置の再検討がなされるためのものであったと一つには言えるように思う。

薄雲巻で藤壺が他界し、源氏のその悲しみがどこに向けられるかと考える時、普通に考えるならば、「藤壺のゆかり」である紫上に向けられて当然であろう。しかし、実際にはそうならず、源氏の気持ち、藤壺の面影を求めて朝顔齋院に傾いていることから、藤壺に最も近いはずの紫上に、彼はもはや藤壺の面影を求められなくなっていたのだということを、一つ確認できると、この巻においては、紫上は、藤壺から人間的にはっきりと離脱していたために、源氏はもう彼女に藤壺の面影を求めることができなくなっていたのだと言えるのではないだろうか。紫上がここで、

「すべての女性に無条件で優越しうる愛情の特権としての「紫のゆかり」の力を失っていた」<sup>注6</sup>のは、藤壺からの人間的な離脱がなされていたからだとは私は考えるのである。

が、もう一つ忘れてはならないのは、そうであるにもかかわらず、紫上が藤壺に似ているということで離れていた源氏の心も紫上に戻ったとする、この事件の結末の部分から、今後も藤壺の面影を求めていくであろう源氏の気持ちを確認されているということである。

外を見出して、すこし傾き給へる程、似る物なくうつくしげなり。かんざし面様の、恋ひ聞ゆる人の、面影に、ふと覚えて、めでなければ、いささか分くる御心もとり返しつべし。(朝顔<sup>p37</sup>)

この箇所は、藤壺と紫上の相似性が強調されているというのではなく、<sup>注7</sup>それよりも、藤壺を求める源氏の気持ちを確認されていることに重点が置かれているのだと思われる。そして、その気持ちには、今後も消えずに続いていくであろうと推測される。

紫上には、もはや藤壺を求められない、しかし、藤壺を慕う気持ちは消えない、というのであれば、源氏のその気持ちは、当然紫上以外の女性に向いていくであろうと予想される。現に、そういう源氏の想いは、後に紫上に最大の苦悩をもたらす女三宮降嫁を引き起こす一つのきっかけにもなっているのである。(女三宮

は、藤壺と血縁関係にあった。) 結局、紫上が藤壺から人間的に離脱できたとしても、源氏の中で藤壺を追い求める気持ちが消えなければ、紫上は藤壺の影から完全に解放されることはないのである。そうである限り、紫上の安定は、相対的なものでしかなく、決して絶対的なものとは成り得ないのだということが言えるであろう。

次に、この事件に関連してもう一つ、紫上の自分の身分や地位に関する苦悩について考えてみたい。この苦悩は、彼女にとって、より深く内面に係わる大きな問題なのである。

紫上は、藤壺との秘密を知らされていないから、この度の危機による自分の地位の下落への不安については、後ろ見なしの結婚の仕方や、その延長としての源氏との親しい生活内容のみに因を求めざるをえないのである。つまり、相手が、自分の地位を脅すというような憂慮は全くなかった明石君の場合とは違い、身分も地位もしっかりとした朝顔齋院ということで、紫上は今までに深く深く苦しむことになるのである。それは、嫉妬の仕方や、そこから考えられる苦悩の性質が、対明石君の時のものよりも、身分の高い女三宮に対する時のそれにより近いということで、まずはっきりと示されているように思う。

明石君に対する紫上の気持ちは、<sup>注8</sup>「めざまし」という紫上の方

が、一步上に立ったような言葉で統一されているのに対して、他人から、源氏の朝顔齋院への執心のことを聞いて煩悶する時の「心憂く」「思ひ乱れ給ふ」「うとましくのみ思ひ聞え給ふ」などの紫上の気持ちを表す言葉は、彼女の苦しい心情を適切に表現していると言えよう。

しかし、紫上は、この苦しみを表には出そうとしないのである。明石君への嫉妬を考えた時に確認した、紫上の本来的な嫉妬の姿勢を示せない程、感情が深く内攻していたのである。「人知れず思し歎かる」「まめやかにつらしと思せば、色にも出し給はず」という態度は、女三宮降嫁の時のそれと一致する。そしてまた、自分の心の内を隠そうと努力するのであるが、「忍び給へど、如何うちこぼるる折もなからむ」という具合に、ふとその悲しさが漏れ出てしまうあたりも、女三宮降嫁の時の苦悩と重なるものなのである。

そして、このように深く思い悩む原因は、紫上の中にある、自分の地位についての不安や、そこから生まれる身分の高い女性に対する劣等感などに求めることができるのであり、これもまた、女三宮降嫁に伴う苦悩の原因と直接的に重なってくるものなのである。「同じ筋にはものし給へど、おぼえことに、昔よりやむごとなく聞え給ふを、御心など移りなばはしたなくもあべいかな、

年頃の御もてなしなどは、立ち並ぶ方なく、さすがにならひて、人に押し消たれむこと、など、人知れず思し歎かる」（朝顔<sup>26</sup>）という紫上自身の思いの中には、そういう劣等感をはつきりと、うかがうことができるであろう。

源氏が執心しているというだけで、実際に朝顔齋院が源氏の妻になるという話は少しもないにもかかわらず、紫上はこの苦しみ様である。もし、身分の高い女性が、実際に源氏の妻となるような事態が起こったとしたら、その時の紫上の苦悩、痛手はどんなものかを想像するに難くない。つまり、この事件での紫上の苦悩は、後の女三宮降嫁での紫上の苦悩を暗示するものであり、また、その伏線としての役割を十分に果たすものであったと考えられるのである。

このように、今回の事件は、紫上に今までにない深い苦悩を与えているわけであるが、直接的な原因は、何といってもやはり、源氏の朝顔齋院への執心である。この事実と関連するとも思えるのだがともかく、この事件によって、二人の間には、今までになかった小さな溝が生じたように私は感じるのである。次の二人の和歌の唱和は、そのことを何よりも端的に示しているのではないだろうか。

月いよいよ澄みて、静かに面白し。女君、

(紫)こほりとち石間の水はゆきなやみ空すむ月のかげぞながる

外を見出して……(中略)……

(源)かきつめてむかし恋しき雪もよにあはれをそふるをしのう  
きねか(朝顔<sup>p37</sup>)

この紫上の歌については、次のような真淵の新釈の説がある。

後撰天の川なみは氷にとちたれやいしまのたきつ音つれもせ  
ぬてふより出て今の哥の本はむらさきのみつからものおもひ  
ふるをそへ末は源のこゝろのまゝにものし給ふをそへたり或  
説には只折ふしのさまなりといへどいとゑじ給ふがやう／＼  
となぐさめ給ふほとん事なればさのみはあらじ(賀茂真淵全  
集 第八巻)

この説は、上の句に紫上の苦悩を、下の句にその原因である源

氏の放恣の行動(浮気)を諷すると解するものである。<sup>注8</sup>紫上が自

らの胸中の苦しみを吐露したと解する説であるが、私も、この歌  
は単なる叙景歌ではなく、苦しい紫上の真情が託された歌だと考  
えたい。一見美しい叙景歌に秘められた紫上の深い思いを知るこ  
とによって、この歌はより一層味わい深いものになるのではない  
だろうか。

ところが、それに対して源氏とは言えば、この歌を詠む紫上の

姿に藤壺の姿を重ね、一人満足しているのである。今、源氏が浸  
っているものは、紫上の容姿に二重写しにされた藤壺との過去で  
しかなく、返歌にもその思いをうかがえる。源氏の返歌は、どう  
解釈しても、紫上の歌に託された思いに応じたものであるとは思  
えないのである。私は、このあたりに二人の間に今まではなかつ  
た、微妙な心の開きを感じるのである。それは、紫上の中に「絶  
対的なものだ」と信じていた愛を、源氏との夫婦仲を、無常のもの  
と感じる部分<sup>注9</sup>」が出てきたためであるのかもしれない。かか  
ける事もありける世を、うらなくて過しけるよ(朝顔<sup>p27</sup>)という  
思いの中には、確かにそういったものを見い出すことができよう。  
ただし、それはまだ「この時点では深められずに、事態が緩和さ  
れれば一応過去のものとなってしまいう性質のもの」<sup>注10</sup>であつたわけ  
である。

その後の巻々に、こういった二人の開きについて触れる部分は  
特にないようであるが、書かれぬ部分で、つまり表面には出ない  
隠れた部分で、その開きは常に存在していたように思う。若菜上  
巻での女三宮降嫁後の、二人の大きな開きは、朝顔巻で生じたこ  
の微妙なずれがもとになり、それが育つたものだと思われる。

#### 四 女三宮

女三宮降嫁は、源氏にとって本当に断りきれないやむをえない



ことであつたのだろうか。もちろん、朱雀院のたつての頼みであるから、断われないという面も確かにあつたであろう。しかし、源氏自身に女三宮に対する興味、好奇心があつたということもまた、否定できないことのように思える。その最も大きなものは、女三宮が藤壺と血縁にあるということによる興味であつたと思われる。

「……この御子の御母女御こそは、かの宮の御姉妹にものし給ひけめ。容貌も、さしつぎには、いとよしと言はれ給ひし人なりしかば、何方につけても、この姫宮おしなべての際には、よもおはせじを」などいぶかしくは思ひ聞え給ふべし。

(若菜上<sup>p34</sup>)

御心の中にも、さすがにゆかしき御有様なれば、思し過し難

くて……(同<sup>p38</sup>)

これらの記述から、まず、女三宮が「藤壺のゆかり」であつたことが、降嫁の一つの契機になつていたと言えるであろう。「源氏自身に好奇心―好色心があつて、若き日の充足されることのない藤壺の宮の面影をまだ追つてゐたことが、女三宮降嫁を決したのだと物語は語っている。」<sup>注11</sup>というわけである。

ところが、紫上は源氏の側のこういった事情については全く知らずにいる。それならば、彼女がこの事件によって、今までにな

い程深刻で辛い苦悩を味わうのは、一体なぜであろうか。私は、その直接的な因は、源氏のもとに降嫁してくる女性が、紫上よりも遙かに血筋のよい、皇女、女三宮であつたことに求めることができるのではないかと思うのである。

相手が、皇女、女三宮であるということで、紫上はまず、自分の地位の下落を考える。源氏の愛情をも含めての今の生活の狀態が崩壊してしまうことを考えた時、全身の血の気が引くような寒さに襲われたであろう紫上が目に見えようである。

しかし、どんなに危惧したところで、この事実は変わりようがなく、紫上は無条件にこの結婚を認め、仕方のないことだと諦めざるをえなかつたのである。彼女は、相手が身分の高い女性であるということでも自らを納得させようとしていたのである。

「……ひとしき程、おとりさまなど思ふ人にこそ、ただならず耳だつ事も、自ら出で来るわざなれ、かたじけなく心苦しき

御事なめれば、いかで心おかれ奉らじとなむ思ふ」(若菜上<sup>p53</sup>)

男女の結びつきで大切なものは、身分などではなく、何よりも相互の愛情であることを紫上は身をもつて感じていたはずである。その紫上がこれだけの苦悩をするということは、この時既に、彼女は源氏との愛に対して自信がもてなくなつていたと言えるのではないだろうか。それだけに、自分の地位の下落についての危惧

はより一層深刻なものであったと考えられる。

源氏、紫上、女三宮という三角関係の中で紫上にもたらされる苦悩は、相手が女三宮であったということで、また、その苦悩はついに彼女を病にまで追い込むことになったということで、今までにない程の深刻な苦悩であったと言えるであろうが、しかし、藤裏葉までの彼女の苦悩と全く無関係ではないのである。

女三宮が「藤壺のゆかり」であったことが、この事件の一つの契機になっているということ、高い身分の女性が出現した時の苦悩がどんなものであるかは、朝顔齋院事件で既に一度確認されているということ、また、明石君との三角関係において、紫上の本来的な嫉妬の性質が示されているからこそ、女三宮降嫁事件で、それとは違ったひたすら忍耐の態度をとる紫上の苦悩が、いかに深いものであるかを知ることができるということ、さらに明石姫君誕生以後ずっと、実子のないことの悲しさを味わってきた紫上であるが、彼女の地位に危機をもたらすこの大事件においては、実子のないことが、益々その地位を不安定にしているのだということ、など、これらをすべて考え合わせてみると、女三宮降嫁事件以前の三角関係における苦悩と、この事件での苦悩とが、何かしらの形で関連をもっているのだということが言えるであろう。

第一部の苦悩の上に立って初めて、第二部の苦悩が重みをもつ

てくるのである。第一部の苦悩が、若菜巻のこの事件に集約されたと言ってもよいかもしれない。そして、このように、苦悩が次第に積み重ねられて、女三宮降嫁に伴う苦悩に到達すると考えるならば、紫上の三角関係における苦悩を見ていく限り、それは、彼女の人生の中で一つに繋がっており、どこにも断絶はないのだと言えそうである。

紫上が、源氏の栄華の中で、彼の正妻格の女性として何不自由なく、人も羨むような理想的な生活を送ってきた女性であることは、誰しも認めることであろう。しかし、所々に現れてくる紫上の苦悩が、一つ一つばらばらではなく、相互に関連しているのだと考えることによって、苦悩の人としての一つの紫上像が鮮明に浮かび上がってくるように思える。苦悩は、紫上の明るく華やかな生活の中で、ある時は表に現れ、またある時はその生活に隠れながら、しかし、常に存在していたのである。その意味で、苦悩は、紫上の人生全体を貫く一つの大きなテーマではなかったかと思うのである。

もし、紫上の人生を、このように、苦悩の人生ととらえるならば、それでは深く苦悩していない時期の紫上像はどういう意味を持つのだろうか。その意味をも含めて、次に、紫上の初期について考えていきたいと思う。

## 二 紫上の初期を考える

### (一) 紫上の不安定な地位とその遠因

前段一、で見てきたように、高貴な身分の女性（朝顔齋院や女三宮）が源氏と紫上の間に入り込んでくる時、その苦悩は深刻であり、紫上の内面に係わる大問題となるのであるが、それはなぜであろうか。直接的な原因は、紫上の地位の不確かさにあると思われるが、ここでは特に、その地位の不安定さを裏付けるものとして、紫上自身の内部にある身分の高い女性に対する劣等感と、源氏と純粹に愛情のみで繋がっているという事実の二つを取り上げて、そのことについて考えてみたいと思う。

紫上には、高貴な身分の女性に対しての一種の劣等感のようなものがあつたようである。それは、源氏の正妻格にありながらも、しっかりとした後ろ見がないために、財力や格式の背景などは全くなく、また、結婚さえも正式な手続きを踏んで行われてはいないというような、紫上の特別な立場からくる劣等感であつたと思われる。故に、女三宮のような確固とした後ろ見を持つ高貴な女性が、正式な手続きを踏んで源氏のもとに降嫁することになれば、紫上は、この劣等感の意識によって、どうしても一歩退かなければならなかつたわけである。

この時、紫上は、愛そのものに不信感を持ったのだともまた、言えるのである。紫上は、自分が正妻格にあるということについて、それが彼女自身の財力や格式の故ではなく、源氏の愛の深さ故の地位であるということを、よくわかつていたはずである。そして、そうであるならば、自分の地位を支えている愛情に対しての紫上の信頼は、相当に深いものであつたと言ふことができよう。栄華の日々の生活の中で、その信頼は徐々に深められていったに違いない。が、身分の高い女性達の出現によって、それは見事に裏切られてしまったのである。朝顔齋院事件で漠然と抱いた愛情への不安は、女三宮降嫁事件で決定的なものとなる。そして、この事件によって、今まで信じてきた愛情の深さも、結局は自分の持つ劣等感を超えて、その地位を守りきることができなかったのだということを、紫上は思い知らされるのである。

このように考えてみた時、結局、自分の立場についての劣等感と、愛情への絶対的な信頼という二つの事柄が紫上の内部に同居することによって初めて、この苦悩が生まれてくるのだと言えるのではないだろうか。つまり、絶対的な信頼を置く深い愛情でさえも、自分の持つ劣等感を超えられなかつたというところに、紫上の深い苦悩があつたことになるのである。

このことを紫上の人生に重ねて考えてみると、しっかりとした

後ろ見を持ち、正式な結婚の手続きを踏んで初めて与えられるべき、当時の平安貴族社会における正妻としての確固たる地位が、そういった条件は一切満たさず、唯、源氏と不確定で頼りない愛情のみで結ばれている紫上に与えられるという特殊な事態、もつと言うならば、矛盾する事態によって、紫上は愛情に対して深い信頼を持つと同時に、自分の立場に対する劣等感をも、持つようになったのである。そして、紫上に苦悩をもたらすこの二つの事柄の遠因、すなわち特殊な事態が、既に紫上の人生の極く初期に起きていたのだと考えるならば、それはまた逆に、紫上に苦悩を与えるために、わざわざ連れて来られるという事態の設定がなされたのだとも、言えるのではないだろうか。

紫上の人生後半の深い苦悩と、登場場面における特殊な境遇の設定とは、このように一つに繋がるのである。<sup>注12</sup> 他の女性達が二人の間に入り込んでくる時に、突然始まったようにみえる紫上の苦悩であるが、その発端ともなるべき遠因は、具体的な苦悩のずつと以前、紫上が物語に登場する時点で、既に彼女に与えられており、結局はそのことが、彼女の内部に問題を投げかけていくことになったのである。

では、物語に登場してから、具体的な事件に遭遇するまでの紫上像は、彼女の人生全体の中で、どう位置付けることができるの

であろうか。次に、そのことについて考えてみたい。

## (二) 苦悩前の紫上

幼い頃に源氏に連れて来られて、そのまま馴れ合いの妻になってしまうという紫上の人生初期の一件が、実は紫上の側から見、後の深い苦悩の内的要因を生み出しているということは、今見てきた通りであるが、また別に、この事件を源氏の側から見ると、連れて来て妻にしたことについては、紫上が「藤壺のゆかり」であるということが最も大きな要因であったと言えるであろう。この源氏の藤壺への思慕が紫上に見えない所でやはり彼女に苦悩をもたらしているのだということは、先に考察した通りである。

(一、(一)藤壺 参照) 紫上の苦悩の内的要因に対して、こちらは仮に苦悩の外的契機とでも呼べるであろうか。

いずれにしても、これらの要因や契機は、紫上が実際に苦悶していない時期には、息を潜め、表面上は彼女に苦悩をもたらしてはいない。しかし、先に考えたように、彼女の人生における最初の部分と、その後半の部分とが、苦悩を媒体としてしっかりと結びついているのだとする時、その間の部分で断絶があったとは考えにくい。むしろ、苦悩は、紫上の人生において最初から最後まで一貫していたのだと考えたい。たとえば実際に苦悶していない時期でも、苦悩を迎えるにあたっての何かしらの意味を持っている

と思うのである。ここでは特に、苦悩の外的契機とも言える、源氏の藤壺思慕ということについて考えてみたい。

こちらも、紫上の内面の劣等感と同じように、朝顔巻までは紫上に苦しみを与える契機とならずにある。では、なぜその間、源氏は外的契機に触れなかったのであろうか。そして、そのことの持つ意味は何であつたのだろうか。私は、それが、朝顔巻の前巻、薄雲巻における藤壺の死と、何か関係しているのではないかと思うのである。

藤壺はその生存中、常に紫上の影のように存在し、そのことによって紫上の地位を安定させていた。つまり、源氏は紫上が藤壺に似ていることを確認し、そのことに満足していたのである。この時期は、源氏の藤壺への思慕が、紫上の地位を安定させていたのだと言えるであろう。しかし、このように藤壺の影の存在が紫上の支えとなつている限り、彼女は、完全に個人として藤壺から独立し得てはいなかったのだということには注意しておきたい。

一方、藤壺死後はどうかと言えば、支えを失つた紫上は、今までの安定性を失い、不安定な立場に追い込まれていく。そして、今度は逆に、藤壺への思慕が紫上に苦をもたらしことになるのである。つまり、源氏が藤壺の面影を紫上に求められなくなつて、その面影を紫上以外の他の女性達に求めていくことによって、朝

顔斎院事件や、女三宮降嫁事件が引き起こされ、そこで、紫上は深く苦悩するというわけなのである。この時、紫上は影の存在を失い、不安定である代わりに、人間的に藤壺から離脱しており、それ故、与えられた苦しみに対して、一個人として真剣に取り組み、内面的に深く苦悶し、葛藤することになるのである。

このように、藤壺生存中とその死後とは、藤壺の影がもたらす紫上への影響は、全く対照的とも言える程に、違つているのである。以上、もう一度整理して、藤壺生存中は、なぜ紫上に源氏の藤壺への思慕を契機とする苦悩が与えられなかったのか、別の言い方をするならば、なぜ源氏は、紫上の苦悩の外的契機に触れようとしなかったのかを考えてみると、紫上が藤壺の影によって支えられ、安定している時期に、同じ藤壺の影によって揺さぶりをかけられるという事態が起こったならば、それはたいへん矛盾した事態であるからだと一つには言えるのではないかと思う。一つの要因が、同じ時期に同じ人物に対して安定性と不安定性という相反する二つの影響を与えるとしたら、それはどこか矛盾していることになるであろう。

また、紫上が、まだ人間的に完全に藤壺から離脱していないような藤壺生存中に深い苦悩が与えられたとしても、それは無意味なことであるように思う。藤壺の影が支えとなって安定している

時期の苦悩は、本当の意味で紫上の内面深くに影響を与えるものとはならないのではないかと思うのである。支えを失い、立場的に不安定になり、一個人として藤壺から人間的に離脱した時に初めて、紫上は苦悩に対して真剣に取り組み、その苦悩を自己の問題として深く内在化することができないのだろうか。

つまり、このような矛盾を避けるために、そしてまた、わざわざ無意味なことをしないためにも、藤壺生存中に紫上に対して、源氏の藤壺への思慕を契機とする深い苦悩が、与えられなかったのではないかと思うのである。

藤壺生存中に、源氏が紫上の苦悩の外的契機に触れようとしな  
いのは、源氏の側から見れば、もちろん藤壺が今、現在、この世に生きているからであろうが、紫上の側から見た場合、また別に、このような意味も考えることができるであろう。人生後半の深い苦悩に真剣に取り組んでいく紫上の姿を思う時、そのことは特に重要な意味を持っていたのだと言えそうである。

朝顔巻までは確かに、深い苦悩を引き出す内的要因となる紫上の劣等感に触れることなく、また、源氏もその苦悩を引き起こす外的契機に触れることなく、ひたすら彼女の理想的な妻としての像に重点が置かれているようである。そして、朝顔巻での危機感もその場限りのもので、それ以上高まることもなく、若菜上巻ま

ではすっかり息を潜め、それ以後は、紫上の幸福で理想的な生活のみが中心に描かれているようである。しかし、その平和で幸せな日々も、苦悩を迎えるにあたっての、何かしらの意味を持っており、決して苦悩と切り離して考えることはできないのである。

紫上の人生は、誰が見ても幸福だと思える時期も、もちろんあり、ひたすら悩み続ける暗い苦しみ的人生というわけではないが、力点が置かれているのは、やはり、後半の苦悩する部分であると思われる。そして、その苦悩は決して突如として現れたものではなく、紫上の初期とは切り離せないものなのであり、それ故、私は、苦悩を彼女の人生における一貫した一つのテーマであったととらえたいのである。紫上の人生の初期を、苦悩と結びつけて考えてみた時、一つ、このように言えるのではないだろうか。

### 三 苦悩が紫上にもたらしたもの

若菜下巻、紫上は、自分の人生を振り返って、次のように語る。

心に堪えぬもの歎かしさのみうち添ふや、さは自らの祈なり  
ける（若菜下巻 p161）

ここで、紫上は生と苦の関連をより深め、苦を生の中の一部としてとらえている。そして、生よりも生における苦の方に重点を置いて考えているのである。さらに、祈り、という言葉から

もわかるように、自分では気づかぬうちに、紫上はここで宗教的な考え方をしているのである。

また、御法巻の冒頭で、紫上は、出家がかなわぬことを自分の前世からの宿世によるのだと考えている。

わが御身をも、罪軽かるまじきにや、と、うしろめたく思されけり。(御法<sup>p91</sup>)

この部分も、紫上はそれとは気付いていなくても、まさに宗教的な考え方と呼べるものであろう。出家できないこと、すなわち救いの道を阻まれたことによって、救いの第一歩を踏み出しているのである。そして、無意識にこの一步を踏み出すまでには、本当に深い深い自己内省が繰り返され、そこには、真剣に自分をみつめる態度が必要とされていたのだと思うのである。

この内省の契機となる深い苦悩を紫上にもたらし、また、彼女の出家を阻んだのは、他ならぬ源氏である。しかし、紫上の以上のような深い内省は、これらの苦悩や難題に反発するのではなく、それを素直に受け止め、自己の問題として深く内在化することによって、なされているということに、ここでは特に注意しておきたいと思う。<sup>注13</sup>

さらに紫上は、晩年、出家を望むようになるが、その意志はかなりしつかりしたものであったと考えてよいかと思われる。紫上

の三角関係における苦悶は、結局、女三宮降嫁に集約されたことになるが、そのことによって彼女は、今まで信頼し続けてきた愛情そのものを憂きものと思うようになるのである。紫上の場合、源氏との夫婦仲をとりもっていたのは、唯、相互の愛情のみであり、そのことによってのみ、紫上の現在の状態が維持されていたのである。彼女の生活全体を、その存在を、生を支えていた愛情が絶対でないと知った時、紫上が出家への思いを抱くようになることは、彼女の人生全体を眺め渡したならば、極く自然な心の動きであったと思われる。

また、出家するにあたって問題となるもう一点、現世への執着についても、源氏との繋がりが愛情のみであり、そのことが現世での唯一の存在理由であったと考えるならば、今、その愛情自体に不信感を持ち、そこから出家を志すことになったのであるから、彼女はもはや、出家の妨げとなるような、この世で執着すべきものは、何も残していなかったのだと私は考える。

出家に関しては、ここではこれ以上深くは触れずにおくが、ともかく、深い自己内省も強い出家志向も、それまで紫上が送ってきた彼女の人生故に成し得たことである。物語の中において、もし、源氏との愛情のみで存在しているという設定がなされていないかったら、また、それがもたないって深い苦悩を経験することが

なかったら、紫上はおそらく、この境地にまで至ることはなかったであろうことを、ここで一つ押えておきたい。

ところで、これ程内面的に深く描かれ、出家を志すまでに至った紫上が、なぜ最後まで形としては出家できず、五戒を受けるだけに留まったのであろうか。最後に、このことについて私なりに考察を加えてみたいと思う。

何よりも、紫上の出家を制し続けていたのが源氏であることから、源氏との係わりあいにおいて出家せずにしたということは、まず最初に気付くことである。紫上が他界した時の、源氏の動揺を考えてみれば、源氏が俗世間にいる間に、もし紫上が山籠もりの出家生活に入ったら、そのことが、源氏の生活に、その人生に、どんなに大きな影響をもたらすかということは、言うまでもないことであろう。しかし、源氏との係わりあいにおいてということばかりではなく、紫上が、一人の女性であるということによっても制約を受けている面がいろいろとあるように思われる。

ここでは、その中でも特に、当時の平安貴族社会の中で、女性がそこまで精神的に高められた上で出家を行うということは、非常に少なかったのではないかということに注目してみたい。もちろん、それだからこそ、紫上の精神がここまで高められたという

ことは深い意味を持つことになるのであるが、「女性の場合に於ける出家はそう一般的なものではなく、病気で延命のために戒をうけるとか、夫の死後その冥福を弔うためとか、時には失意孤独の境遇のためなどであったようである。『昔は経をよむだに人は制しき』と日記にも言っているように、女性に対する出離の道は、そう容易に開かれていたとも思われない。」<sup>注14</sup>というのが、女性の出家に対する当時の一般的な考え方であったと思われる。

そういう当時の一般的な常識を超えて、もし紫上を内面ばかりでなく、外面的にも理想的な形をとらせて出家させてしまったとしたら、それはまるで、現実性に欠ける夢物語のようになってしまったであろう。一人の人間として、現実立脚しながら、その内面まで深く描き続けてきた紫上を、ここで夢物語の主人公のようにしてしまつては、それまで描いてきた意味を、すべて失うことにもなりかねないのである。

紫上は、逆に言えば、深く描かれ過ぎたために出家できずいたと言えるのかもしれない。源氏物語の中でも、女性達は、藤壺を初め、朝顔斎院、朧月夜、女三宮と、みなそれぞれに出家しているのだから、紫上とて、女性は出家しにくいという理由で出家できなかったというわけではあるまい。彼女は、内面的に深く描かれ、そしてその内面は、最終的には、作者が考えていたで



あろう理想的な出家の形をほぼ整えるまでに至っていた。だから、その上、外面的にも出家の形をとることを許してしまつては、まるで型破りで現実性を失つてしまう。そういうことから、敢えて出家せずに、紫上はその生涯を閉じたのだと言えるのではないだろうか。

作者は、一般的な世間の常識をきちんと心得ていたのである。

紫上がいかに理想的に描かれようとも、それは決して現実離れしたものではなく、実際にありうる可能性を持ったものなのである。そしてまた、それだからこそ、紫上の人間像は、より価値のあるものになるのだと思われる。

## 結語

紫上の、一見理想的に見える人生の裏には、このような深い苦悩があったのである。紫上の幸福な人生に突然現れたかのように見えるこれらの苦悩は、よく考えてみれば、紫上の人生全体を貫く、一つのテーマとしてとらえることができるのである。ということはつまり、彼女の表向きは理想的に見える人生は、常に裏側の苦悩に支えられており、そのことによって初めて成り立っていたというわけである。源氏の妻としての地位と生活に安住し、幸せの上に胡座をかいているような人物として、紫上は描かれては

いない。一見、幸福そうに見える人生の裏に、実はこのような苦しみもあったのだと考える時、紫上の人間的な魅力は倍増し、その価値はより一層高く評価されるのだと思われる。そして、紫上を晩年、出家を志すまでの高い境地に至らせたものは、他ならぬ彼女の人生における、この苦悩なのであった。

出家に関しては、ここでは詳しく触れることができなかったが、宗教的な様々な背景があると思われ、紫上のこの出家についても、そういう角度から深く考えてみる必要が当然あると思われる。この問題は、私自身の課題として、今後も考えていきたいと思っていることなのであるが、しかし、そのような宗教的な意味での出家を考える以前に、まず、そこに至るまでに必要とされる人間的な精神の葛藤や苦渋がいかに大切であるかということをここでは一つ忘れずに確認しておきたいと思う。

そのことは、紫上の苦悩の受け止め方にもはっきりと示されているのであり、苦悩、即出家への逃避ではなく、出家志向に至る以前の、苦悩に真剣に取り組む、自己内省を繰り返していったという彼女の人間としての価値ある態度こそが、ここでは高く評価されて然るべきものであるように思う。

紫上の場合、源氏に発見され、源氏に引き取られたということから、思ってもみなかったような人生が展開していくことに

なったわけであるが、その中でも特に、彼女がこのように、幾つもの苦悩を経験し、それを一つ一つ乗り越えてここまで生きてきたのだということを思う時、御法巻での、人々に惜しまれての静かな終焉は、まさにその人生にふさわしいものであったと言えることができるように思うのである。

## 注

- 注1 以上「幸人」についての見解は、昭和五十六年度「源氏物語第一部の方法(1)」の講義の内容の一部であるが、これはこの論文を書くきっかけともなったことなので、そのまま使わせていただいた。
- 注2 安藤亨子「紫上をめぐる物語構造」(「解釈と鑑賞」昭和55・5)
- 注3 藤村 潔『源氏物語の構造』(桜楓社 昭和46)「紫上の創造」p13
- 注4 斎藤暁子「紫上の嫉妬―明石及朝顔齋院―」(「むらさき」昭和50・6)
- 注5 注4に同じ
- 注6 注4に同じ
- 注7 紫上は、もとからその容姿が藤壺に似ていたのである。いかに紫上が藤壺から人間的に離脱したとしても、源氏が紫上に藤壺を重ねてみるものがなくなったというわけではあるまい。しかし、ふと覚えて「というここでの表現には、違ふ所なく(葵<sup>54</sup>)、違ふ所なし(賢木<sup>84</sup>)」など、他の比較の箇所で見られるような相似性の強調は認められないということには注意したい。

注8 今井源衛『源氏物語講座』第三巻(有精堂 昭和46)「紫上―朝顔巻における―」p344

注9 小野村洋子『源氏物語の精神的基底』(創文社 昭和45・4)「紫上における「あはれ」の深化」

注10 注9に同じ p224

注11 阿部秋生「紫上の出家」(「国文学論叢平安文学」昭和34・11)

注12 次の二つの論文において、紫上の苦悩とその特殊な境遇が結びつくとする見解がある。

荒 暁子「紫上における二つの「理想性」とその接点」p4(「東

北大学日本文芸論稿」8号 昭和53・12)

池田 勉『源氏物語試論』(古川書房 昭和49)「源氏物語」若紫巻の解析」p156

注13 以上の紫上の内省についての見解は、丸山キヨ子先生が昭和57・7・3学習院大学における、紫式部学会主催の源氏物語講演において「紫上を考える」という題目で述べられたものの一部と重なるものである。私も、その通りであると思うので、ここで使わせていただいた。

注14 関みさを「源氏物語の女性―出離本願から見た―」(「文学」昭和24・12)

源氏物語本文引用には日本古典全書『源氏物語』(朝日新聞社)を使用した。

(昭五八 日文学)